ISSN 1349-385X

名古屋大学 大学文書資料室ニュース

NUA Nagoya University Archives

Nagoya University Archives News　第23号　2007. 11

目次 Contents

神奈川県立公文書館視察記 ―― 2

復活した東海学士会寮歌祭 ―― 4

資料室だより

『第八高等学校』と『ちょっと名大史』（増補版）を刊行しました ―― 5

愛知医学校記念碑が名大に寄付されました ―― 6

資料室日誌（抄） ―― 7

初代総長渋沢元治関係資料を一般公開しました ―― 8

愛知医学校記念碑（詳しくは６ページを参照）

神奈川県立公文書館視察記

大学文書資料室では、7月31日（火）に神奈川県立公文書館を視察しました。同館は、1993（平成5）年11月に開館した、日本で最も進歩的で施設も充実した地方自治体アーカイブズの1つとして知られています。

大学文書資料室の山口拓史室員と堀田慎一郎室員は、京都大学大学文書館の西山伸准教授が主催する科研費による「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」（2005～2007年度）に、共同研究者として参画しています。その2007年度第2回の研究会が7月30・31日におこなわれ、その2日目に神奈川県立公文書館を視察することになりました。

同館は、横浜市旭区中尾にあります。横浜市の中心からはやや離れていますが、横浜駅から相模鉄道急行で11分（二俣川駅下車）、さらにバスで4分（運転試験場下車）、ついで徒歩3分と、交通の便は悪くありません。

1993年に建設された同館の建物は、まさ「館」というにふさわしいものです。鉄筋コンクリート地上4階・地下1階建て、建築面積3,672㎡、延床面積9,956㎡（うち書庫面積3,189㎡）をほこり、35台収容可能な駐車場もそなえています。二重防水屋根や二重壁、ドライエリアなど、資料保存を重視すると同時に、周辺の環境との調和や開放的なイメージを表現するための配慮もなされています。

研究会一行の視察は10時から始まりました。それから2時間にわたって詳しくご案内いただいたのは、同館行政資料課副主幹の石原一則氏です。石原氏は、日本を代表するアーキビストの1人であり、多くの論稿も発表するなど、世界に著しく立ち遅れている日本のアーカイブズを牽引する存在です。3年前には、大学文書資料室のワークショップ「アーカイブズのすすめ」でも講演をしていただきました（講演内容は、『名古屋大学史紀要』第12号に掲載されています）。

神奈川県立公文書館全景

前半の1時間で、一般の入場者は見ることのできない、この研究会の目的である公文書の評価選別作業にかかわる施設を回り、詳しい説明をうけました。

最初に案内されたのは、地下1階の荷解・選別室（358㎡）です。神奈川県では、1年でダンボール約2万1千箱の非現用文書（保存期間が満了した行政文書）が生じます。そのうち1年保存文書は原則としてそれぞれの部局で廃棄されますが、残る約1万1千箱は全て、トラックなどで運び込まれます（6月と9月の2回）。これが文書館での評価選別の対象となります。このうち1千冊ほどが10年・30年文書で、残りは3年・5年保存文書です。

すでにこの時には、6月に搬入された非現用文書入りのダンボールが、部局別に積み上げられていました。この部屋は一面が全てシャッターになっており、トラックが直接乗りつけることができます。さらにローラー付きの手動コンベアーが部屋を斜めに横断して、ダンボールの搬入がしやすいようになっています。広

荷解き・選別室

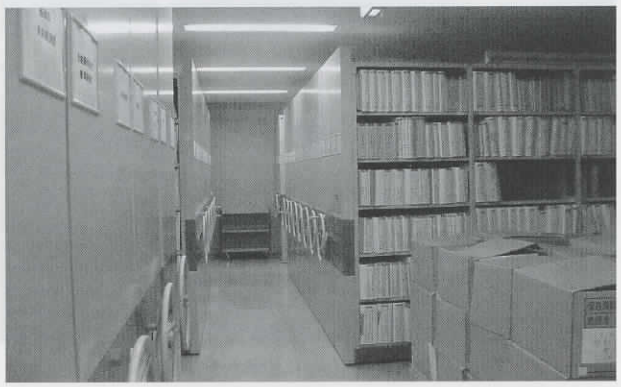
さもさることながら、大変機能的です。

ここで、6月から1月にかけて、石原氏を中心とする10人の公文書館行政資料課常勤職員が手分けをして、「歴史資料として重要な」（神奈川県立公文書館条例）文書を選び出します。

神奈川県では、「神奈川県立公文書館公文書等評価基準」（神奈川県告示）が公表され、さらに「神奈川県立公文書館公文書等選別のための細目基準」、「神奈川県立公文書館選別基準実施要領」が定められており、評価選別作業はこれにしたがって進められます。ただ基準はあっても、それだけで評価選別ができるわけではなく、常に議論や研究を続けながらの作業です。選別の最小単位はフォルダー（3年・5年文書）および簿冊（10年・30年文書）であり、それらを再分割して選別することはしていません。昨年度は、文書館に引き渡された文書のうち3.4％が記録史料としての保存評価をうけ、その他の文書は廃棄処分されています。

保存が決定した文書は、記録史料として書庫へ移されます。それが次に案内された3階の行政文書用書庫（3号書庫）です。床面積は680㎡ですが、全てが周密書庫になっており、効率よく記録史料を保存されています。また同公文書館は神奈川県の歴史にかかわる古文書も収蔵しており、これは同階5号書庫に保存されています。この5号書庫は、床・壁・書架が全て木製です。またフィルム・テープ類や、さらに行政刊行物も他の書庫に収蔵されています。同公文書館の所蔵資料点数は約66万点にのぼります。

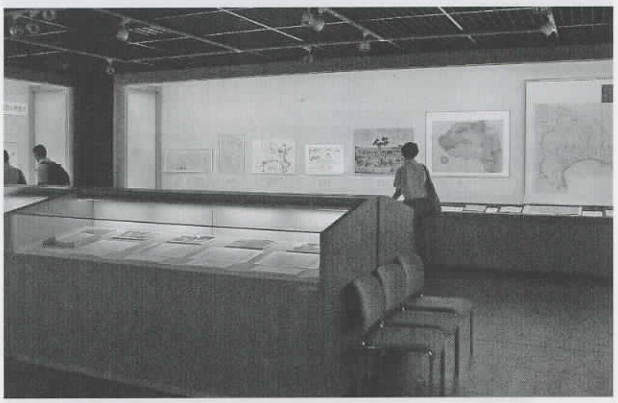
さらに同館の2号書庫（370㎡）は「中間保管庫」として、現用文書も保存しています。神奈川県では、本庁の10年・30年保存文書のうち、文書完結後5年を経過したものは公文書館に移し、保存期間が満了するまでの間、ここで保管されることになっているのです。これにより、本庁の限られたスペースを効率的に運用できるだけではなく、公文書館が長期的な視野をもって、効率よく評価選別できるようになります。大学文書資料室でも、名古屋大学に中間保管庫（中間書庫）を設置することを構想しています。



中間保管庫

後半の1時間では、石原氏との質疑応答をおこないました。すでにその内容の多くはこれまでの文章の中で述べてきましたが、それ以外では、保存した記録史料の公開体制についての質問がなされました。詳しく述べる余裕はありませんが、公開できない部分をマスキングして対応し、簿冊やフォルダー全部を非公開とすることはしないとのことでした。また、各部局からの理解を得るための取り組みについては、各部局の文書事務担当者200人以上を毎年集め、説明会を開いているそうです。これをきっかけに、思いがけない重要文書が出てくる場合もあるとのことでした。

同館はこれ以外にも、資料の修復やマイクロフィルム化、常設展のほかに展示会（年4回、さらにミニ展示5回）、外部講師なども招へいしての古文書解読講座（年14日）、実習生やインターンシップの受け入れ、神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会の事務局業務など、幅広い活動をしています。



常設展示室

年度事業費約1億円、行政資料課のほかにも管理企画課、郷土資料課を持ち、常勤職員だけで24名を擁する同館は、日本の地方自治体では限られた存在です。しかし欧米諸国では珍しくないものであり、日本でもこれくらいがスタンダードになってしかるべきだと思います。

神奈川県立公文書館の理念は、文献などで理解していたつもりでしたが、今回の視察でそれが具体的な実感をともなったものとなりました。名古屋大学と神奈川県とでは、組織の性格も規模も異なりますが、参考にできる部分は積極的に取り入れていきたいと考えています。

復活した東海学士会寮歌祭

8月25日（土）、名古屋栄の国際ホテルにて、「復活第3回東海学士会寮歌祭」がおこなわれました。大学文書資料室は、東海学士会（東海地方在住の旧制高等学校出身者による団体）の中心になっている八高会（第八高等学校同窓会）からのご招待をうけ、取材のためこれに参加しました。

今回の寮歌祭には、全国の旧制高校出身者とその同伴者合わせて約450人が集まりました。ホテルの大広間は一杯となり、参加した方々の平均年齢は80歳を超えているにもかかわらず、会場が活気にあふれていたことが印象的でした。

開会のセレモニーのあとは、38校が順番に舞台に上がって、それぞれの代表的な寮歌を、校章の入った旗を振りながら声を張り上げて熱唱していきます。皆さん学校ごとにおそろいのハッピを着て、頭には学帽や鉢巻です。中には高下駄や羽織袴、マントなど、当時の服装を再現していた方もいました。

学校ごとに寮歌を熱唱する参加者たち

この寮歌祭は1963（昭和38）年からはじまり、休むことなく毎年おこなわれてきましたが、参加者の高齢化を理由に、第40回の2002（平成14）年を最後に中断していました。それが一昨年から復活し、今回が3回目にあたります。

こうした盛大な集会が、旧制高校が廃止されて60年近くもたった現在までこれほど熱心におこなわれ、しかもそれが寮歌祭という形をとっているのはなぜなのでしょうか。それは、旧制高校という戦前期における日本独特の制度に由来しているように思われます。

旧制高校は、後期中等教育および専門教育を目的とし、ほとんどの男女が進学するようになった現在の大衆化された高校とは全く別の教育機関でした。高等普通教育をおこなう学校として位置づけられ、大学予科としての性格を持つと同時に、進学者が同年代男子の1パーセントにも満たない、いわばエリート養成学校だったのです。その記憶はそうした選ばれた者のみで共有され、それが出身者の結束を固めているようです。

しかも、エリート校だからといって、勉強に追われる3年間であったかというと、そうではありませんでした。語学などの一般教養を中心とした、ゆとりをもったカリキュラムを、多くのすぐれた教官によってじっくりと学ぶことができました。お互いを高めあいつつも、青春を謳歌し、友情を育てる環境が確保されていたのです。

しかも、旧制高校の多くは全寮制であり、学生自治が認められた学生寮はそうした学生たちの思い出が凝縮された場でした。寮歌は、寮生たちの作詞や作曲で毎年のようにつくられ、さまざまな行事で必ずといってもよいほど歌われました。寮歌は、彼らの青春を象徴するものであるといえます。

こうした旧制高校に対し、「大日本帝国の贅沢品」との評価もあり、戦前期にも廃止論議がありました。しかし出身者の方々のほとんどが、旧制高校制度を高く評価し、その教育をうけたことに誇りをもっています。だからこそ、かつて存在した全38校全ての代表者が、今なお一ヵ所に集って旧交を温めるのでしょう。

出身者の方々の高齢化が進み、旧制高校を自らの経験によって語ることのできる人も、これからますます減っていきます。その歴史を後世に伝えていくため、この数年が聴き取りや史料の収集を重点的に進める最後のチャンスとなるでしょう。大学文書資料室も、八高会などのご協力をえながら、第八高等学校の歴史を語る史料の収集に鋭意努めてまいります。

会場全景（栄・国際ホテル）

資料室だより

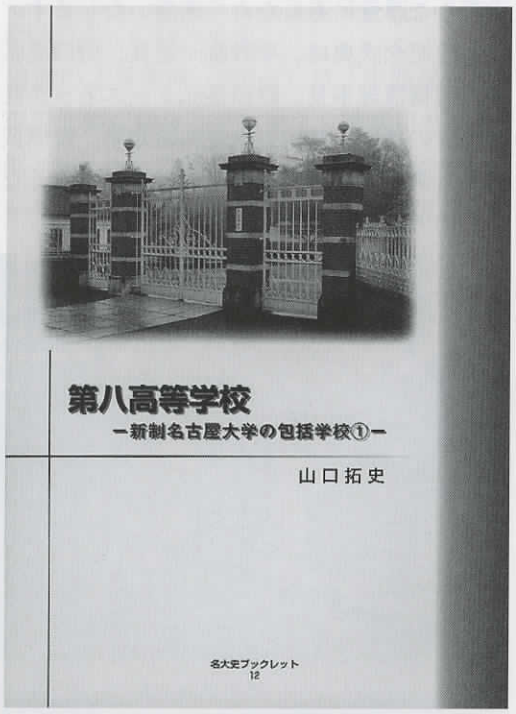
○『第八高等学校』（名大史ブックレット）と『ちょっと名大史』（増補版）を刊行しました

このたび大学文書資料室では、『第八高等学校―新制名古屋大学の包括学校①―』と、『ちょっと名大史』の増補版を刊行しました（いずれも今年３月）。

前者は名大史ブックレットの第12巻にあたり、シリーズ「新制名古屋大学の包括学校」はこれで完結となります。第八高等学校（八高）は、1908（明治41）年に日本で八番目の旧制高等学校として愛知県愛知郡呼続町（のち名古屋市）に設置され、戦後の新学制への移行にともなって1950（昭和25）年に廃止されました。名大旧教養部の前身にあたり、教養教育の源流ともいえます。本書は、約40年余りにわたる八高の歴史を、旧制高等学校として特質や創設の経緯、学生生活、戦時下の状況、名大への包括、現在も活動している同窓会などを中心に、写真や図表を多く用いながら、50ページに分かりやすくまとめたものです。

後者は、大学文書資料室が名大の月刊広報誌『名大トピックス』の裏表紙に連載している、「ちょっと名大史」をまとめて単行本にしたものです。すでに刊行済のものを大幅に増補し、第59回までを収録しています。こちらも毎回多くの写真や図表を使った、楽しい内容になっています。

上の刊行物の入手を希望される方は、郵便、FAX、Eメールでお申し込みください（本誌裏表紙参照）。尚、ブックレットは、大学文書資料室のHPからデジタルブックやPDFファイルで閲覧・ダウンロードすることができます。



愛知医学校記念碑が名大に寄付されました

このたび、特定非営利活動法人名古屋外科支援機構から、名古屋大学医学部の前身にあたる愛知医学校・愛知病院の記念碑が建設寄付され、10月９日に完成記念式典がおこなわれました。

建設地は、以前は天王崎町と呼ばれた、かつて愛知医学校・愛知病院があった所です（名古屋市中区栄１丁目）。1871（明治４）年に名古屋県仮病院・仮医学校として誕生した愛知医学校ですが、紆余曲折の末、ちょうど130年前の1877（明治９年）にこの地へ移転しました。その際、初めて医療や医学教育の専門施設を新築することができたのです。その後、1914（大正３）年に現在も医学部のある鶴舞キャンパスに移転するまで、ここに愛知医学校（のち愛知県立医学専門学校）があったのでした。

昨年11月、名古屋外科支援機構の塩野谷恵彦顧問（本学名誉教授）から、記念碑を寄付したいとの相談が大学文書資料室にあり、羽賀祥二室長を座長とし、塩野谷名誉教授、高橋昭名誉教授、西川輝昭教授（博物館長）、山内一信教授（現在は藤田保健衛生大学教授）、加藤鉦治教授、山口拓史室員、堀田慎一郎室員からなるワーキング・グループが発足しました。このWGで記念碑の原案を作成し、本学役員会に提案した結果、創立70周年事業の一環として位置づけ、寄付をうけることになりました。その後も、WGは記念碑のデザインや碑面の内容を中心に検討を重ね、完成の日をむかえることになったのです。

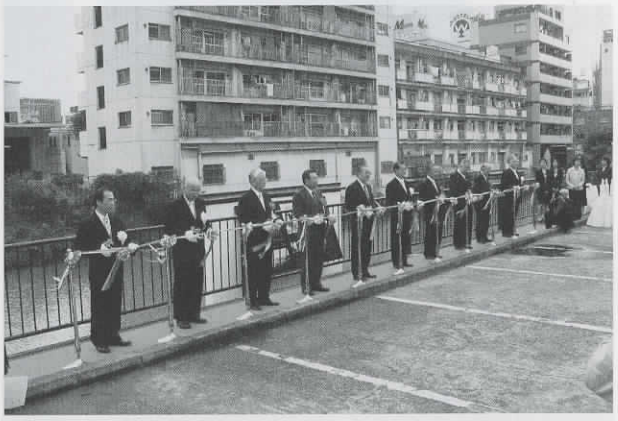
記念碑は、台座部をいれると高さ３m20cm、幅３m50cmという大きなものです。デザインは、当時の建造物をイメージしました。愛知医学校が「河の学校」として親しまれた由緒と、堀川振興の願いもこめて、記念碑は跡地に隣接する堀川河岸に、川に向けて建てました。碑は磁器陶板製であり、一面に当時描かれた有名な「愛知病院の外科手術の図」が特殊な技術で転写されています（本号表紙参照）。また、道行く人々にも見てもらえるよう、碑の裏側に大きな説明版を設置しました。

堀川に浮かべた船からみた記念碑。現在のところ川岸に下りることは禁止されている。

道路に面した側の説明版

今回の建碑においては、建設費約1,500万円の立派な記念碑を無償で寄付いただいた名古屋外科支援機構のほか、愛知医学校跡地に本社がある株式会社トーエネックからも、碑の建設地が無償で貸与されました。大変なご厚意にあらためて感謝いたします。

完成記念式典は、平野眞一総長、山口晃弘名古屋外科支援機構理事長、野田泰弘トーエネック社長などの関係者のほか、神田真秋愛知県知事、松原武久名古屋市長も来席し、それぞれの祝辞をいただくなど、盛大なものとなりました。



テープカット

資料室日誌（抄）

２月５日　愛知医学校建碑 WG を開催（以後、３／８、３／20、４／18、５／７、５／28、６／４、７／９に開催、いずれも於資料室）。

２月６日　各部局に平成17年度学内印刷物の提供を依頼。

２月15日　堀田慎一郎室員が核融合アーカイブズ共同研究全体会議に共同研究者として出席、「大学文書資料室の資料公開基準とその改訂について」を報告（於核融合科学研究所）。

２月20日　大阪商業大学・谷岡学園法人本部から視察のため来室。

２月22日　豊田講堂改修工事にともない、資料室所蔵のキャンパス模型をシンポジオン倉庫から共同教育研究施設に移動。
愛知医学校建碑 WG が（株）トーネックを訪問し、建設場所等について相談。

３月１日　大学文書資料室運営委員会（第11回）開催。

３月２日　山口拓史室員がトーエネック社とともに愛知県尾張建設事務所を訪問し、愛知医学校建碑について相談。
堀田室員がキャンパスミュージアム小委員会･全学展示スペース検討 WG 合同会議（第２回）に出席。

３月９日　総務部にシームレス型記録管理システムについて説明。

３月13日　山口室員と堀田室員が八高会を訪問し、資料を受贈。

３月15日　情報統括本部、情報企画課にシームレス型記録管理システムを説明。

３月19日　経済学研究科の非現用文書を第６実験棟へ搬入。

３月23日　名大 HP の「名大の授業」に「名大の歴史をたどる」を掲載。

３月24日　山口室員と堀田室員が科研費研究会に共同研究者として出席、山口室員が「大学アーカイブズによる法人文書管理支援と評価選別」を報告。

３月27日　小谷凱宣名誉教授より資料受贈。

３月30日　名大史ブックレット12巻を刊行。

３月31日　紀要15号、保存資料目録７集、資料室ニュース22号を刊行。

３月31日　坪井直志専門職員が異動。
小田嶋徹専門職員、山崎真理子事務補佐員が退職。

４月２日　武藤英幸専門職員、奥谷明稔主任が着任。

４月３日　新規採用職員研修において、羽賀祥二室長が資料室の概要を説明し、山口室員が「名古屋大学の歴史について」講演。
福﨑真由子事務補佐員が着任。

４月10日　全学教養科目「名大の歴史をたどる」開講。

４月11日　総務部長来室、資料室について説明。

４月17日　水谷伸治郎名誉教授より資料受贈。

４月19日　島岡眞氏より資料受贈。

４月24日　羽賀室長、山口室員、堀田室員が博物館長と八高会を訪問し、八高創立100周年記念展示企画について協議。

４月27日　愛知医学校建碑 WG がトーエネック社にて施工関係の打ち合わせ

５月10日　堀田室員がホームカミングデイ実行委員会に出席。

５月25日　大学文書資料室運営委員会（第12回）開催。

５月28日　創立70周年記念事業について秘書課長と面談。

６月11日　内山晉名誉教授より資料受贈。

６月19日　若尾祐司教授より三鬼清一郎名誉教授寄贈資料を受領。

６月26日　全学教養科目「名大の歴史をたどる」において、平野眞一総長が「名古屋大学運営の基本姿勢」をテーマに講義。

７月３日　愛知医学校建碑について平野総長・高橋理事等と面談。

７月９日　理学研究科を訪問し、資料を受贈。

７月10日　山口室員と堀田室員が科研費研究会に共同研究者として出席、山口室員が大学文書資料室についてコメント。（於京都大学）

７月11日　総務課長と愛知学校記念碑について打ち合わせ。

７月23日　『名古屋大学大学文書資料室紀要』第16号の原稿募集を学内外に発信。

７月30日　山口室員と堀田室員が科研費研究会（平成19年度第２回）に出席（～31日、於東京大学、神奈川県立公文書館）。

○初代総長渋沢元治関係資料を一般公開しました

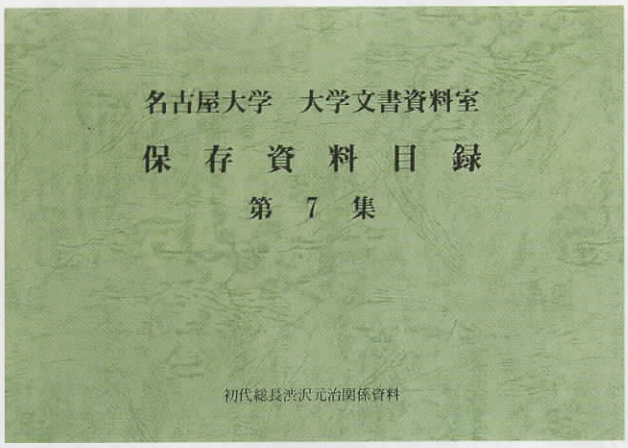
このたび大学文書資料室では、名古屋大学の初代総長である渋沢元治（しぶさわ・もとじ、正式には澁澤）の個人資料を一般に公開しました。

渋沢元治（1876—1975）は、渋沢栄一の甥として埼玉県に生まれ、第一高等学校から東京帝国大学工学部に進み、電気工学を学びました。その後、海外留学をへて逓信省に入り、黎明期にあった日本の電気行政を確立しました。その後、官界から東京帝国大学教授に転じ、定年退職後に名古屋帝国大学の総長に就任しました。戦後には文化功労者に選ばれ、現在もつづく「澁澤賞」が創設されるなど、その業績は高く評価されています。

この渋沢資料は、渋沢自身が作成・収受・保存してきた、その一生を語る文書を中心に、その家族に関するものを加えた1080点の史料群です。名大の歴史に直接関係する史料は少ないものの、渋沢が名大の初代総長に任じられたことは、その官僚・電気工学者・大学教育者としてのキャリアときわめて密接なつながりがあります。名大創設の背景を語る貴重な資料として、永く保存するに足るものだと思います。電気工学史、電気行政史、東京大学史の一面を語る重要な史料であることはもちろんです。

大学文書資料室にご来室のうえ、申請書をご提出いただければ、どなたでも閲覧することができます。冊子体の目録のほか、資料室のHPから電子検索することもできます。

渋沢元治関係資料



名古屋大学大学文書資料室編刊『名古屋大学大学文書資料室保存資料目録　第７集　初代総長渋沢元治関係資料』（2007年３月）。資料は渋沢の各時代ごとに分類され、簡単な史料解題も付いている。

名古屋大学大学文書資料室ニュース 第23号
Nagoya University Archives News No. 23

名古屋大学大学文書資料室
室　　長　羽賀祥二（教授・併任）
専任室員　山口拓史
　　堀田慎一郎
専門職員　武藤英幸
主　　任　奥谷明稔
事務員　増田よしみ

発行日　2007年11月30日（年2回刊）
編集
発行　名古屋大学大学文書資料室
名古屋市千種区不老町〒464-8601
電話：(052) 789-2046
FAX：(052) 788-6222
E-mail: nua_office@cc.nagoya-u.ac.jp
印刷　株式会社荒川印刷
名古屋市中区千代田2-16-38